



[講演]

# 短期日本語プログラムから 見る日本語教育の可能性

異文化コミュニケーション学部教授、  
前日本語教育センター長  
池田 伸子 氏

○池田 皆さん、こんにちは。異文化コミュニケーション学部、日本語教育センター員の池田と申します。本日は、土曜日のいいお天気の中、足をお運びくださりまして、ありがとうございます。私さっき、ゲホゲホやっておりましたが、ちょっと鬼の霍乱で風邪をひいてしまいまして、こんな声でお届けすることをお許しください。通常は、とても美しい声なんですけど、ちょっとガラガラしておりますのでご容赦ください。

今日、これまで文化社会講義を担当してくださった先生方、それから RiCoLaS の活動を通して通訳として短プロを支えてくださった先生に、立教大学の短プロが、今までどういうふうに通訳されてきたかということについて、頭の中に光景が見えてくるような素晴らしいプレゼンを 3 件続けてしていただけたと思っています。

また、最初に丸山先生から、今日の趣旨説明として、立教大学が国際化の中で、日本語短期プログラムを始めるに至った経緯、それから、どういう状況で、どういう目的を持って短期プログラムを企画し、トライアルを経て、今年度運用しているかということをお話しいただけたと思います。

私はそこを引き継いだ形で、立教大学の日本語教育センターとしては、本格実施初年度、つまり今年から本格的に始まっている短期日本語プログラムが、日本語教育センターに、今後どんな可能性を見出してというか、期待してくれているのか。また、日本語教育センターが、そこから考えていかねければいけない大学の中での役割はどんなものなのかということについて、お話をしていきたいと思っています。【スライド⑤-1】

今日のお話ですけれども、まず、立教大学が恐らくここにいらして下さっている多くの方々の大学と同様に、今、激しい国際化、グローバル化の波の真ただ中にいるという現状をお話しさせていただきまして、その中で、立教大学がどういう日本語短期プログラムというものを運営しているのか。そこから見えてくる可能性、そして、最後、一番重要なんですが、その可能性を現実のものにしていくための課題という順番でお話をしていきたいと思います。【スライド⑤-2】

今、立教大学がどんな状況にあるかということにつきましては、最初に丸山先生からも、それから、豊田先生からもお話をいただいたかと思います。立教大学は、「Rikkyo Global 24」というものを掲げて、2024年にその掲げた目標を実現すべく、日々、日々、血を吐くような努力を続けている真ただ中でございます。その中から、今日は日本語教育センターに関係が深いものを2つだけここに挙げさせていただいています。最初のもは丸山先生のプレゼンの中にもありましたように、留学生数です。なんと、Global 24を策定した当時の4倍の数の留学生を、2024年までに実現するとなっていますし、それから、受け入れる留学生の数ということに関連するとすれば、海外の協定大学の数も、日本語教育センターには大きく関わってまいるところでございます。それも、この「Global 24」が発表された当時は、100そこそこぐらいですよ、小塚さん。100いていましたっけ。

○小塚 協定校数ですか。

○池田 はい。

○小塚 140から150です。

○池田 140から150、この「Global 24」ができたとき？

○小塚 現在は190。

○池田 190ということで、200、ここは何とかいけそうだと思うんですけど、こういうふうに、立教大学は、「Global 24」の中で、何と、非常に正直に数、つまり「頑張ります」とか、「努力します」とかじゃなくて、具体的な数を出して、プロジェクトを掲げているので、その数値目標が達成できたか否かというのは一目瞭然なわけで、この達成に向けて、日本語教育センターは、できることをやっていかなければいけないという、そういうミッションのもと、パッションを持って、アクションをしまいったというところですよ。

その中で、これまで、これだけではないですけれども、この短期日本語プログ



ラムが始まるまでの日本語教育センターは、主にどんなところから、立教大学全体の国際化、ひいては、「Rikkyo Global 24」、これを実現するためにできるだろうかということを中心に考えて、アクション、実行してきたということになります。それは、大ざっぱに言うと、留学生数の受け入れが増えるということは、正規の留学生の受け入れが増えるということで、そうなれば、日本語力の幅、その正規の留学生の日本語力の幅が広がってくるということは予想できますので、これまで入ってきた正規の留学生の幅よりも、もっと広い層の留学生に対して、適切に効率的な日本語教育、これを提供していかなければいけないだろうというふうに考え、そのためには何ができるのかということを探し、実行してきたことがあります。

それからもう1点は、留学生数の中には、正規留学生ではなくて、いわゆる立教大学では、特別外国人学生というふうに変な名前では呼ばれております、いわゆる半期、1年の協定校からの短期の留学生、そういう学生も増えてきますので、そういう学生に対して多様で、つまりレベルだけではなくて、どういうコンテンツの科目を提供するのかということにおいても、多様で魅力的な日本語科目の提供ということも、重要だと考えて実行のための努力をしてまいりました。立教大学の日本語プログラムを経験して帰った短期の学生が、「立教大学よかったよ」というふうに口コミで広めてくれるということが、例えば、アメリカやイギリスや、オーストラリアの大学が、日本国内に多くの協定大学を持っていたときに、「立教大学ってよかったよ」という、その留学生のつぶやきが、「じゃあ自分は、いっぱい日本の中には大学あるけど、立教大学行こう」と思う学生を増やしてくれる。ということは、たくさん日本の中に協定大学があっても立教大学を選んでくれる学生が増えることにつながっていくので、立教大学に短期で来ている学生にどういう経験をさせて、どういう思いで国に戻すのかということは、日本語教育センターがまじめに考えて取り組まなければいけないことだろうと考え、そのために、きちんと行動をしてきたということもあります。

それからもう一方で、大学の国際化が進んでいくと、各学部や研究科の中で、留学生を受け入れる数が増えたり、あるいは英語で展開するプログラムを積極的に展開しようという動きが出てまいります。その中で、それぞれの研究科や学部の特性に合った日本語カリキュラムを提供してほしいというような願いがぼつぼつ出てくるようになりまして、そこで、日本語教育センターは、日本語教育セ

ンターが持っているノウハウ、それからスキル、それから知識、それを使って、どうしたら、その研究科や学部が望むような科目を提供できるかということを考え、それを実行してきたということがございます。

日本語教育センターは、日本語教育センターなので当たり前と言えば当たり前なんですけれども、本学における日本語教育の質、多様性、日本語教育自体の魅力、それを売りにして、何とか立教大学の国際化に貢献できないか、あるいは立教大学を海外で周知してもらおうとか、立教大学自体のプレゼンスを高めるということを、支えられないかということを常に考えながら動いてきたんです。実際は、もっといろいろなことをいっぱいやっているんですけど、本当に大ざっぱに言うと、こういう流れで日本語教育センターは今まで来ております。**【スライド⑤-3】**

そこで、そうは言っても、今お話ししたような日本語教育を売りにした、日本語教育センターの支援だけでは、留学生数4倍というところには、若干厳しいかもしれないという状況がTGUの折り返し地点を迎えたところでだんだん見えてくるわけです。なので、じゃあ何か、今までとは違うことで、留学生数をくるくる、くるくる回していけないかというようなことがあり、そこで短期。短期というのは、先ほど私が使った短期ではなくて、超短期というふうに私たち日本語教育センターは呼んでいるんですけども、つまり、ワンセメスターいない、2、3週間。立教では3週間と考えていますけれども、そういう超短期のプログラムを、年に何クールか実行することで、そこで留学生の数をきちんとふやしていくことができるのではないかと考えたということです。

そんな状況の中で、短期日本語プログラムを、日本語教育センターで何とかやってくれないかというような動きがあり、そこから、丸山先生が先ほどお話ししたように、どういうものができるのか、どういう規模でできるのか、どういうコストでできるのかということを考えて、今、今日、3人の先生にお話しいただいたような形で、走っているところです。

今日の3人の先生方からのお話からもわかりますように、立教大学の短期日本語プログラムの最大の目玉は、値段の高さではなくて日本文化社会講義です。日本文化社会講義というのが立教大学の本当に短期日本語プログラムの命です。魂と言ってもいいかもしれません。日本文化社会講義というのがどういうものなのかということについては、韓先生、それからカトリン先生、それからそこに、どういうふうにRiCoLaSが絡んでいるのかという、具体的なお話から、大体わ

かっただいていられるかもしれませんが、私からは、もう少し、日本語教育センターの立場から、この日本文化社会講義がどういふふうには素晴らしいのかということをお伝えできればと思います。

まず、日本文化社会講義というのは、日本語や日本文化を学ぶということ、あるいは、英語で専門講義を聞くということ。それから、日本語の授業にゲストで日本人学生が参加するという、これまで多くの大学の日本語の短期プログラムで行われていたようなことについては全部「やらない」というところからスタートしているということです。普通、日本語教育センター独自で、日本語の短期プログラムをデザインする場合、つまり、全部自前でやりなさいと言われてしまうと、最初の、日本語と日本文化を学ぶ。来た学生は、日本語と日本文化を学んで帰っていくんだというところに落ちつかざるを得ないという状況があります。なぜなら、日本語教育センターのスタッフは、どんなに優秀でも、どんなに努力家でも、どんなに自分の専門分野ではないことを必死で徹夜で学んだとしても、やっぱり立教大学の各学部、各研究科にいる、それぞれの分野のプロフェッショナルの先生にはなれないからです。だから、日本語教育センターが、自前で全部、短期プログラムをやれと言われると、私たちがプロフェッショナルとしてできることを提供するしかない。つまりは、何かというと、日本語を教えること。それから、私たちの視点からの日本文化であるとか、日本の社会というものを留学生に示していくこと、それしかできないんです。だけれども、立教大学は後発だということもあり、これはやらないというところからスタートしたということです。

それから、英語で専門科目を超短期の学生に聞かせて、そこで、専門的な知識を学ばせて帰すということをやっている大学もございますが、立教大学の日本語教育センターが目指した日本文化社会講義は、英語で専門講義を、その超短期のプログラムの学生に聞かせるということが、プライオリティーのトップではありませんでした。各学部、それから研究科が持っている、立教大学のいろいろな素晴らしい専門分野。それを、どう超短期の学生たちに知ってもらって、伝えて、そして、自分の国に持ち帰ってもらうかということ。それが一番のプライオリティーでした。ですから、さっき RiCoLaS の武田先生のお話にもあったように、講義をなさってくださった先生方の中には、日本語で講義をなさって、そこに RiCoLaS の学生が、しっかりと、その先生の講義を通訳してくれるということも現実にございます。

単に英語で講義を聞かせるということが、プライオリティーの一番最初になってしまうと、英語で講義ができる人から、順番をお願いをしていくということになるので、そうすると、例えば専門分野の偏りであったりとか、あるいは、もしかすると、その分野はどこの大学でも大体英語で講義ができる先生がそろっていて、とかということが見えてくる。そうすると、立教大学の日本語短期プログラムとしての特徴とか魅力とか、ここに参加しないと聞けない内容とか、ここに参加しないと話してもらえない、体験できないコンテンツというものの魅力が、ものすごく薄くなってしまふ。逆に言うと、日本のどこの大学に行っても、こういう講義だったら英語で聞けるよね、というような講義のラインナップになりがちだということです。

私たちは、それを絶対したくなかったので、まず、立教大学の中には10の学部があって、それぞれが、すごく特徴のある教育を展開していて、そこには、いろいろな専門を持った、魅力的な先生がたくさんいる。それをちゃんと、超短期のプログラムを通して、海外に届けなければいけないというところからスタートしているので、まず英語で専門講義をやりましょう。そこを軸に、日本文化社会講義を組み立てましょうというような考え方は全くしませんでした。

また、日本人学生と絡ませましょうというのは、多くの超短期のプログラムでもなされていることですが、私たちは絶対に、ゲストとして、あるいはちょっと参加してもらおう存在として、日本人学生を考えなかったということです。これは、3人の先生方がおっしゃってくださったように、私たちは、日本語の短期日本語プログラムを、単にお金を払っていている留学生のためのものだけではなくて、立教大学の学生に対しての短期プログラムにもしたかったという思いがあるからです。

だから、実際に学んでもらうためには、ゲストとしてワンセッション入ってもらおうというだけではやっぱり足りない。気づきには、もしかするともかもしれませんけれども、気づきではなくて、やっぱり学んでほしいという思いがすごくあったので、単に日本人学生と接触させればいいのか、1回、何か交流させればいいのかというようなデザインには絶対したくなかったということがあります。こういうふうにはしたくない、こういうことはやりたくないというところから、一生懸命考えて、この素晴らしい超短期日本語プログラムが、今、1年目ではあります。【スライド⑤-4】

そこから見る日本語教育センターの可能性ということについてなんですが、さっきもお話したように、これまで日本語教育センターは、やっぱり日本語教育というものを軸に日本語教育、それから日本語教育に関する研究を軸に、立教大学のプレゼンスを高めるということに努力してまいりました。けれども、この超短期プログラムをトライアルとしてやってみて、私たちが気づいたこともございます。そこから見えてきた可能性をこれからお話ししたいと思います。可能性としては、3つあります。まず1つ目は、各学部、それから研究科であってもいいのかもしれませんが。その立教大学の各学部、研究科が持つ魅力を引き出す、そういうプロデューサーとしての役割、それが、もしかしたら日本語教育センターにはあるのかもしれないということです。韓先生、それからカトリン先生のお話からもわかるように、観光学部、それからコミュニティ福祉学部の中には、本当にいろいろな先生がいて、今回、カトリン先生も、韓先生も、この短期日本語プログラムに積極的にですよね。嫌々じゃないですよね（笑）、積極的にね。進んで協力をしていただいたということで、これから自分たちのそれぞれの学部で、どういうことができるのかという、その可能性を感じてもらえた。どういうふうにしていけるかということを感じてもらえたということがあると思います。この役割は、可能性は、日本語教育センターとしては、とてもこれから求められていくところではないかと感じています。

10も学部がありますので、国際化に対して内向きな学部、それから、えらい積極的な学部、外向きな学部、いろいろなベクトルを持った学部があります。何か、国際化イコール、英語でカリキュラムとか、英語で授業ということになると、外向きのベクトルを持っている学部にスポットライトが当たって、そこが活躍していくというイメージだと思うんですが、今回のプレゼンテーションを通してわかると思うんですが、内向きの学部であるからこそ、留学生にとって魅力的なコンテンツを出せるということがすごくあります。

例えば、外向きな学部であっても、その領域では、いわゆる欧米先発のグローバルスタンダードというのが非常に一般化していて、世界中、どこの大学で学んでも、同じグローバルスタンダードが学べるというようなコンテンツは、留学生にとっては面白くも何ともないんです。何のために、日本に超短期の留学に来ているかというと、ローカルなもの、つまり日本的なもの、もっと自分たちが知らないもの、あるいは知りたいもの、それが聞きたいということです。そういうコ

コンテンツは、内向き、つまり日本の国、あるいは日本的なものを深く掘り下げている学部の先生であればあるほど持っています。なので、そういう先生をさっきのどなたかのお話にもありましたけれども、やる気にさせる。そういう技術を、うちの丸山先生は生まれ持った才能として持っておりますので、そういうところから、各学部の先生、これまで、自分にはあんまり関係ないと思っていた先生方を、一人一人やる気にさせていく。そこから、各学部の、留学生に対する態度を養う種をまいていくというのかな、そういうようなこと。あるいは、その先生が、もしかすると自分で気づいていないかもしれない、自分が持っているコンテンツの見せ方。留学生に対して見せていくためには、どういうふうに見せていくと留学生は食いつくのかというようなところ。それをプロデュースしていくという役割が、これから日本語教育センターには課されているのではないかと。そして、それができる可能性というのを、日本語教育センターは秘めているんじゃないかというふうに感じました。

次に、きょうのプレゼンの中でも多くの先生が言ってくださったように、私たちは、関連する部局と部局、それから人と人、これをつないでいく、そういうコーディネーターとしての役割、これも今後、大いに力を発揮していく可能性を秘めているのではないかと思います。人と人と言うと、例えば短期留学生と日本人学生だけではなくて、短期留学生と立教の留学生、それから短期留学生と教員、それから職員、そういう人たちを結びつけていく。この短期プログラムを軸として、どんどんネットワークを広げていく、人と人をつなげていく。それから、学部と学部だったり、学部と部局だったりというものが、この短期プログラムというものを起点にして、どんどんつながっていく。これが、単に立食パーティーとか、単なる飲み会を通して、人と人がつながっていくよりも、立教大学の国際化にとってメリットがあるのは、その軸になっているのが短期プログラムだということなのです。

短期プログラムの実現を通して、いろいろな人たちがつながっていく。短期プログラムというものを中心にしていろいろな部局がつながっていくと、どうしてもそこでの話題だったり、これからどうしていったりとか、そこでどうすることが困ったかという話題は、やっぱり留学生とか、国際交流とか、日本人と留学生の、どうしたら交流させられるかとか、どうしたら自分たちの学部のコンテンツを、海外にもっと出せるかとか、そういう話題になりやすいんです。だから、短

期プログラムを通してつなげていくと、ちっちゃいかもしれないけれども、国際化とか、留学生というところに、意識が向いた人たちの輪が、どんどんつながっていくというメリット、それが非常に大きいというふうに思います。そういう輪が、どんどん、どんどん、大きくなってくれば、立教大学全体が、そういう波の中に、だんだん入っていく、そういう可能性を秘めているということです。

最後は、立教大学を世界に向けて PR していく可能性も、この日本語短期プログラムを通して、私たちは感じました。これまでは、立教大学は、これだけ素晴らしい日本語教育のカリキュラムを持っていますとか、私たちは、これだけ素晴らしい教育研究をし、海外で使われる教材を開発し、こんなこともしていますという、日本語教育を中心にした立教大学の PR、それを私たちはやらなければいけないと思っていましたが、立教大学の短期プログラム、さっきのようなかわいいホームページを通して、これまでどういう文化社会講義が行われたのかというものを、英語で発信していく。そういうことは、立教大学が持っているいろいろな学部、研究科の中にある専門領域を世界に発信する。短期プログラムのホームページですから、そこに食いついてくる海外の学生は、日本に興味を持っている学生です。薄いかもしれないけれども、どこか日本の短期留学先ないかなというふうに考えている学生に、立教大学のそういう素晴らしい、いろんな知を届けられたら、あっ、何かこの大学ってこんなことできるんだ、あんなことできるんだということが、そこから広がっていく。そういう PR の仕方を、私たち日本語教育センターというのは持っているんじゃないか。それも大きな可能性なんじゃないかというふうに思っています。そのためにも、私たちがやっていかなければいけないのは、さっき申し上げたような、他大にはない日本語短期プログラムです。それをやっていると、それが、きっと立教大学を世界に向けて PR していくところに結びついていくでしょうし、実際に短期プログラムに参加した学生は、そこを通して、立教大学への正規留学を考え始めたりしています。超短期プログラムから正規留学へのつながりにも結びつくし、協定大学にこういうコンテンツがあるんですよということを示すことは、協定大学をふやしていくということに対しても、何らかの貢献はできるのではないかと考えています。このようなプロデューサー、それからコーディネーター、それから PR 担当という、3つの新しい可能性というのが、この短期プログラムの実施から、私たち日本語教育センターには見えているというのが今の段階です。



それ以外にも、短期留学生だけではなくて、日本人学生も、ともに学びを得る、その仕組みというのが、この短期プログラムから見えてまいりましたし、それから、先生方のプレゼンにもあったように、担当してくださった先生方自身が、留学生と、これまでよりもっと直接的に、もっと密にかかわって日本文化社会講義をやっていたことで、学部の留学生政策に影響を与えていく可能性も秘めています。カトリン先生や、それから韓先生が、観光学部や、コミュニティ福祉学部の中で、面白いからもっとやろうよ。留学生とうちの学部の学生が、こういうふうに交流することで、学生はこんなに変わる。モチベーションも高まるし、こんなふうには効果があるんだ。だから留学生を受け入れるということは、悪いことじゃない、どう受け入れて、どう日本人学生と交流させていくかということを考えていけば、留学生をもっと積極的に受け入れていってもいいんじゃないか。あるいは、もっと積極的に、ちょっと外向きにベクトルを向けてみてもいいんじゃないか。というふうに、日本文化社会講義を通して、各学部の留学生政策、あるいは各学部の国際化戦略というものに、わずかかもしれないけれども、いい影響というのが与えられるのではないかと思います。【スライド⑤-6】

そして、今 お話ししてきたような可能性が、日本語教育センターとして実現できていけば、素晴らしいし、立教大学にとってはとてもいいことだと思うんですけども、そこに至るためには、やっぱり結構な課題があるというふうに、日本語教育センターでは感じています。繰り返しになりますが、短期プログラムの一番の肝は、やっぱり日本文化社会講義、ここです。これが本当に命だし、肝です。短期プログラムの肝は、日本文化社会講義なんですけれども、さっき丸山先生からのお話にもあったように、どう、その日本文化社会講義を回していくかというのが、目下、日本語教育センターにとっては一番の課題となっております。これは、さっきも申し上げましたように、私たちではできないことなんです。私たちがやってはいけないこと、逆に言うと。立教大学のほかのプロフェッショナルな先生方に登場いただかないと、この日本文化社会講義というのが成り立たない。そうすると、丸山先生は一生懸命、どこにお願いしたらいいかということで悩み始めるわけですが、やっぱり、どうお願いしていけばいいのか。断られたらどうすればいいのかというところについてはかなりの負荷が日本語教育センターにかかっています。これを安定的に実現していくためには、大学からの強いサポートというか、サポートだけではなくて、何かしらのシステム化が必要だと思っ

ています。例えば、順番に、10 学部が持ち回りで1 つずつ科目を展開していくような仕組み、それを作っていただければ、あとは丸山先生がその気にさせて、その学部に参りますということです。だけど、どこの学部から始めるということは、かなり難しいということなので、まずその仕組みというものを、大学としてつくってもらえないかということ、まず1 つ課題として感じています。

それから、どうすれば立教大学の学生をもっと巻き込めるかということなんですけれども、さっきお二人の先生がいみじくも同じことをおっしゃってくださったんですけども、例えば、そこで担当の学部になった先生方は、もっと事前学習とか事後学習にがっつりと自分のところの学生をかませて、やっぱり日本文化社会講義という経験を、学部の学生の学びとしてもしっかりと学生が意識できるように、例えば、授業化したい、単位化したいという思いはあるんだと思います。そのためには、どういうふうにしていけばやりやすいのかという問題が1 点あると同時に、日本語教育センターとしても、違った形で、例えば日本文化社会講義が、10 学部持ち回りになったとすると、日本文化社会講義で恩恵を受ける学生は、もしかすると5 人とか、6 人とか、10 人かもしれない。でも、もしそれが全学で、抽選登録ではあるかもしれないけれども、ほかの学部の学生が参加するような形での実現ができれば、そして、それが半期の科目として設定できれば、そこはほかの学部にとってもメリットがあることかもしれない。

あるいは、同じような、日本文化社会講義と同じような学びが可能な、日本語教育センター科目を、日本人学生と留学生が同時に履修できるように展開させてほしい。これはもう10 年前からお願いしているんですけども、日本語教育センターの科目は、日本人学生は履修できませんというのが立教大学のルールなので、いまだ実現に至っていません。でも、やっぱり立教大学の日本人の学生が、立教大学にも、日本が好きで、興味を持って、半期、あるいは1 年、留学しに来ている特外の学生と一緒に、日本語で何かを学ぶという科目を履修することは、さっきの超短期プログラムの中の、日本文化社会講義と同じような効果を、立教大学の学生に与える可能性を持っています。だから、日本語教育センターをそういうことができる組織にしてほしいというふうに思っています。

なので、日本語教育センターをどういうふうに大学の中で位置づけていただけるのか。単位を付与できて、それから日本人に対しても科目を展開できる組織として、ちゃんと位置づけていただけるのかというのは、これから本気で、本当の

意味で立教大学が、もしかすると留学に行かない留学生も含めて国際化させていくということを考える上でとても大事だというふうに思っています。これは、私が考えるに、大して難しいことじゃないと思うんですけども、なかなか実現されないということで、これからもしっかりと、これが実現されますように、副総長も来てくださっていますので、しっかりと持ち帰っていただきまして、日本語教育センターの本当にちっちゃな、ちっちゃなちっちゃな願いだというふうにお伝えいただければと思います。【スライド⑤-6】

私たち日本語教育センターは、これからも、大学の組織ですので、立教大学の国際化のためにできることを何でもやっていきたいという気持ちは持っています。だけれども、単なる数のために動きたいという気持ちは毛頭ありません。やっぱり私たちが動くことで、立教大学のプレゼンスが高まる。それから、立教大学の学生自体の学びの質が高まる。それから多様化する。立教大学に來ている留学生の学びも、他大では味わえないものになっていく、そういうことを目指して、私たち日本語教育センターは、これからも頑張ってまいりたいと思います。ありがとうございました。【スライド⑤-7】

○数野 池田先生、ありがとうございました。

それでは、ただいまより10分間の休憩に入りたいと思います。第2部の開始は3時35分からとさせていただきます。なお、本日は同じフロアで授業が行われておりますので、恐れ入りますが、廊下では休憩中もお静かにお願いいたします。

【スライド⑤-1】

## 短期日本語プログラムからみる 日本語教育（センター）の可能性



立教大学日本語教育センター  
池田 伸子

【スライド⑤-2】

## お話しの流れ

- 
- 
- **そこから見てくる日本語教育センターの可能性**
- **可能性を現実にするための課題**



【スライド⑤-3】

## 国際化にまい進する立教大学

**Rikkyo Global 24**

Project 07 現在500名の留学生を2019年に1000名（2倍）  
そして2024年に2000名（ナント！！4倍！！！！！！）

Project 13 海外協定大学を2024年には200に拡大

本学における日本語教育の質の高さをウリにした  
大学の国際化への貢献

日本語教育センターが目指してきたこと

- ・ 日本語力の幅が広がる正規留学生への適切な日本語教育の提供
- ・ 増え続ける半期から1年間滞在する留学生への多様で質の高い日本語教育の提供
- ・ 各学部、研究科のプログラムへの日本語教育での連携

【スライド⑤-4】


## 立教の短期日本語プログラム

### 日本文化社会講義

~~日本語・日本文化を学ぶ~~

~~英語で専門講義を聞く~~

~~日本語の授業にゲストで日本人学生~~




【スライド⑤-5】

## 日本語教育センターの新しい可能性

各学部の持つ魅力を引き出すプロデューサー

関連部局、人と人をつなげるコーディネーター

立教大学を世界に向けてPR



- ◆ 内向き、外向き。学部  
の埋もれた魅力を  
発掘して売り出す。
- ◆ 魅力的に見えるコン  
テンツ開発を支える。

- ◆ 短期留学生、日本人学  
生、立教の留学生、教  
員、職員。
- ◆ 学部と学部、学部と部  
局、学部と留学生。

- ◆ 立教の「知」を世界に。
- ◆ 他大にはないプログラム。
- ◆ 短期⇒正規学生へ。
- ◆ 協定大学数増への貢献。

短期留学生だけでなく、日本人学生もともに学びを得る。  
担当した教員が留学生とつながる⇒学部の留学生政策に+の影響を！

【スライド⑤-6】

## 可能性を実現するための課題


短期プログラムの一番の「キモ」は、日本文化社会講義

各学部との連携をどう強化し、安定した協力体制を構築するか

大学としてのガバナンス、リーダーシップが必要

どうすれば、立教大学の学生をもっと巻き込めるか

日本語教育センターを単位認定権のある組織に。  
必要なときにすぐ柔軟に動ける組織に。



【スライド⑤-7】

